中国視察団馮氏来学

日本学術会議の招きに応じて郭沫若氏を団長とする中国学術視察団が来日した。そこで中国に関する学術研究、文化、交流を持つ本学は、一行を招くため骨折られて来たが、遂に一行のうち副団長、広州中山大学副校長馮乃超（ひょうだいちょう）が招請を承諾された。馮氏は八日午後来豊され市民の歓迎を受けた、翌九日は朝から本学をおとずれ、華日辞典の編集状況など見学した。

馮乃超氏は八日午後四時三十四分豊橋駅着特急「ハト」で来豊し、出迎への本学わだつみ会、中国研究会員らの合唱する中国々歌に迎えられて下車、市民代表の花束贈呈後駅長室での記者会見では「日中両国が一日も早く国交を回復し自由に行き来することを望みます」とステートメントを述べた。

馮氏の来豊は戦前戦後を通じて今度が初めてであるが愛知県は馮氏が第八高等学校（名大）の出身である関係から切っても切れないなじみ深い地である。

馮氏の歓迎会は午後五時十五分市公民館で盛大に開催、日中学術の交流、貿易促進が叫ばれている折心から日中国交の回復を願っている学生、一般人によって同会場は国際親善の空気に満ちあふれた。

同会は日中友好協会理事長伊藤武雄氏（本学講師）の挨拶から始まり会場一杯に埋め尽くした参会者を前にして馮氏は「両国の平和建設その有意を大切にし色々な方面にし両隣国人民のお互の気持を深く理解して行こう」と国交回復の必要の意を示した。次いで小岩井本学学長、日中友好協会豊橋支部長鈴木本学教授、市民代表早川氏、本学自治委員長及部君等の歓迎の祝詞を受けられ、両国の友交、発展を祝した堅い握手がかわされた。翌九日朝、馮氏は本学図書館、研究室を視察し、九時半より学生歓迎会に臨むため学内八番教室に向った。伊藤氏の紹介に続いて、万歳の拍手をあびた馮氏は次のように語った。

皆様の盛大な歓迎を心から感謝します。豊橋に着いたとき意外に思ったことは豊橋市民の皆様が新中国を理解し、友情が非常に深いという印象で、この学校の校長、教授、学生方の非常な団結、活溌な校風からもうかがわれる。このような学校は日本にもそうないと思う。学校は校舎によって定まるものでなく、それが良い悪いでその標準が決定するものではない。愛大は現在の日本の現状にふさわしく仕事、勉強に現在の世界に連関をもって結ばれていると思う。このような学校は次の時代の人材を養成させ、この学校の特徴として今日現われてきたと思う。この愛大の存在によって、豊橋市民、学生がこのように中国に関心をもっておられることを中国人民に報告したいと思います。図書館、研究室等をみせて頂いてしかもここで日華辞典をつくるという文化交流の仕事をやっておられることは中国人民にとってはみのがせないことである。そしてあらゆる方法を

つくして援助したいし、又学生交換にも今後大いに努力したいと思います。

〔注〕　愛知大学新聞　昭和三十年十二月十五日所載。

中国学術視察団の馮氏　きょう愛大を視察

【豊橋発】来日中の中国学術視察団の首席団員馮乃超氏（広州中山大学学長）は、愛知大学視察のため案内役の日中友好協会伊藤武雄理事長とともに八日午後四時三十四分豊橋駅着の特急「はと」で着いた。

ホームで歓迎の愛大学生らが合唱する中国国歌に迎えられて下車した馮氏は、まず出迎えの小岩井愛大学長と握手し、市民代表牛込京子さん（一四）から贈られた花束を受け、同駅長室で記者団と会見したのち、同市公民館での歓迎会に臨んだ。

歓迎会では会場を埋めた参会者を前に馮氏は「二千年も結ばれている日中友好のキズナをますます固めるよう」とあいさつし、小岩井学長、日中友好協会豊橋支部長鈴木愛大教授、市民代表早川延海氏、片山豊橋教育委員長らの歓迎の言葉を受けた。

続いて同会で馮氏を囲んで懇談会が開かれ、同夜は蒲郡ホテルで一泊した。九日は朝九時から愛知大学を視察、かつて郭沫若氏の好意で同大学に贈られた華日字典の編集ぶりを見たのち名古屋へ向い、名古屋大学主催の歓迎会に臨み、午後二時五分名古屋駅発の特急「つばめ」で郭団長らと合流、京都へ向う予定。

馮乃超氏談　私は大正十年から十二年まで名古屋の旧第八高等学校に在学したことがあり、愛知県は懐しい土地だ。豊橋ははじめてだが、愛知大学のことは華日字典の編集を通じて聞いていた。

注　朝日新聞　昭和三十年十二月九日所載。

〝愛大の友好活動に敬意〟

中国学術視察団　馮首席団員が豊橋へ

【豊橋発】中国学術視察団の首席団員馮乃超氏は、八日午後四時三十四分、豊橋駅着〝はと〟で来豊した。駅ホームには招待者の小岩井愛大学長をはじめ各教授、片山豊橋市教委長らのほか、歓迎のプラカードを揚げた愛大生数百名がつめかけ、新中国の国歌を合唱して出迎えた。黒のオーバーに紺のダブルという英国紳士型の馮氏はにこやかに降りたち、豊橋真田工業常務牛込憲三氏令嬢京子さん（一三）から花束が贈られた。ついで駅長室で記者団と会見〝日本と中国がなるべく早く国交を回復し、自由に往来できるようにしたい。その意味で、両国の文化交流に積極的な活動を続けている愛知大学に敬意をもっている。私は大正十年から三年間名古屋の八高に学んだから豊橋は懐しい〟と語った。

同五時から駅前公民館での歓迎会に臨み〝日本と中国は二千年来の友達で、戦争はあったが、その友情は中断されなかったと信じている〟とあいさつした。引続き同所で歓迎代表者らと約一時間懇談、同夜は蒲郡ホテルで一泊した。なおきょう九日は午前九時から愛知大学を見学、同十時四分発の名鉄電車で名古屋に向う。

注　中日新聞　昭和三十年十二月九日所載。

市民と和やかに交歓

馮副団長　愛大視察に豊橋へ

【豊橋発】訪日中の中国科学院学術視察団一行のうち副団長馮乃超氏は伊藤日中友好協会理事長、林見総理府事務官の案内で八日午後四時三十四分豊橋駅着特急「はと」で来豊、駅長室で記者会見を行い「愛知大学は中国から引揚げの先生がおられるということでよく知っていた。とくに新しい華日辞典が編さんされていることも聞き大きな期待をもってやってきた」とのべた。つづいて千余名の学生や市民に取巻かれ豊橋駅前の公民館での歓迎会に臨み「これから日中両国はしっかり手を握りあって世界平和へ進んでい

きたい」となだらかな日本語であいさつした。小岩井愛大学長らから「こんな片田舎にも日中友好を念願する人々がたくさんいるということを中国の人たちに話してください」と歓迎の言葉があり、午後六時会を終った。

なお同夜は蒲郡ホテルで一泊、九日午前九時から愛知大学の中国研究諸施設、華日辞典編集状況などを視察したのち、名大差回しの自動車でかつての母校名大教養部（旧八高）を訪れる。

注　毎日新聞　昭和三十年十二月九日所載。

〝早く日中國交の正常化を〟

中國学術視察團　馮首席団員豊橋で語る

既報、来日中の中国学術視察団の副団長（首席団員）馮乃超（ヒョーダイチョー）氏は愛知大学の招きにより昨八日午後四時三十五分着下り特急ハトで日中友好協会理事伊藤武雄氏に伴われて来豊した。

豊橋駅ホームには小岩井愛大学長をはじめ松葉、鈴木（択）の教授、台湾から招かれた欧陽張講師ら教授陣のほか片山市教育委員長、日中友好協会豊橋支部の早川延海氏それに韓国居留民団の人々や学生約五十名が出迎え、同ホームで豊城中学二年の牛込京子さんが市民代表として馮氏に花束を贈呈、また愛大学生たちは「歓迎」のプラカードを押し立てゝ中国語の歌を口々に唱つて迎えるなど豊橋駅は一瞬日中両国の友情でわき立つたが、馮氏は駅長室で記者会見し、たくみな日本語でおよそ次のように語つた。

馮＝中国学術視察団の一員として、また団長の代理として豊橋に来たところ盛大な歓迎をうけて心から感謝の意を表します。

団員全員が来られなかつたことを残念に思います、愛大からのお招きもあり、名古屋までそのまゝ通つて行くことは非常に気がすまないと思い、是非お会いしたいと思つて来たのです、このむね市民諸君によろしくお伝え下さい、中日友好関係もだんだんよくなっていくでしよう、よろしくお願いします。

問＝日本は何年ぶりですか

答＝三十年ぶりぐらいと思います。

問＝日本および日本人にのぞみたいことは？

答＝私が日本に来て感ずるのは日本国民が中国人に友好的な態度をもつていることがよくわかりました。要望することといえばなるべく早く国交を正常化し、自由に往来出来るようにしたら非常にいゝと思います。

問＝日本の学界をどうみているか？　答＝まだよくわからないがあらゆる面に深い研究が行われていると思います。

問＝愛知大学について

答＝中国にいた先生が大ぜいいると聞いている、また華日辞典を編纂しているし中日文化交流のために重要な部分だということを知っている、それで私はその辞典がどのぐらい進んでいるか、そして編纂に従事している方々に敬意を表したいと思つて来たのです。

【註】馮乃超氏は大正十二年名古屋八高を卒業、東京大学文学部哲学科で美学を専攻、卒業寸前に帰国した、現在は広州（広東）の中山大学副学長をつとめている。

なお馮氏は豊橋駅到着後、駅前公民館で開かれた懇談会にのぞみ、蒲郡ホテルに宿泊した、きょう九日は午前中愛知大学を視察し、名古屋へ向う予定。

注　不二タイムス　昭和三十年十二月九日所載。

豊富な中国資料に感嘆

馮副団長　愛大を視察

【豊橋発】既報、中国学術視察団副団長馮乃超氏は九日午前八時四十分愛知大学を訪問、視察した。小岩井学長の案内で史学、国研、図書館、中国図書館などをみて回り、古い漢書から現代中国文献にいたるまでその豊富な資料に驚きの声をあげたが、とくに華日辞典編さん所では膨大なカードを一つ一つ出して調べ、鈴木編さん委員長に「早く完成したいものですね」と語った。特別教室に集った約一千名の学生に

「学長はじめ学生が和やかに団結している非常にいい学校です。愛大のおかげで豊橋も中国と深い関係を持つようになるでしょう。中国研究の意義は大きく私も中国に帰ってこのことを報告し、できる限りの援助をします」

と感想をのべ、同九時四十分学生たちの歌う新中国国歌に送られて名大出迎えの車で名古屋にたった。

郭氏一行京都へ

郭沫若氏ら中国科学院学術視察団一行十五名は九日午前九時東京発〝つばめ〟で京都に向かった。同夜はミヤコ・ホテルに泊り、十三日まで大阪、京都を視察する予定。

注　毎日新聞　昭和三十年十二月九日所載。

教授 学生 交流に努力

【豊橋発】蒲郡ホテルで一夜を明かした中国学術視察団の馮乃超氏らは九日午前八時四十五分愛知大学を訪れた。学長室で小岩井学長始め各教授と歓談したのち同大学国際問題研究所、中国図書室、華日辞典編纂所、図書館などを視察とくに華日辞典編纂所では主任の鈴木択郎教授から説明を聞きながらカードを手にとり〝なかなか大変な仕事ですね〟と興味深そうだった。ついで八番教室に集った約五百名の学生に対し〝愛大の存在により豊橋市民はほかのどこの都市よりも中国に対する理解と友情をもっているようだ。今後ますます両国の友情を高めるため教授、学生の交流を実施するよう努力したい〟とあいさつした。

同九時四十五分、玄関前で数百名の学生が日中親善歌「東京--北京」を合唱するのに手をふってこたえ、名大差回しの自動車で名古屋へ向った。

注　中部日本新聞　昭和三十年十二月九日（夕刊）所載。

愛大に來なかつたら あとで後悔しただろう

来日中の中国学術視察団ヒョウ首席団員は八日来豊、同夜は蒲郡ホテルに一泊、九日午前八時四十分視察のため中日友好協会理事、伊藤武雄氏の案内で愛大を訪れた。小岩井学長、松葉教授らの案内で華日辞典の編さん状況、崔山文庫、中国図書館、国研など全国一を誇る愛大中国関係の図書を細く視察したあと、八番教室で約十分にわたり学生に講演を行い、小岩井学長らに

愛大に来て非常に良かった。中日友好に役立つ華日辞典の編さんや中国関係の図書館を持つ愛大の視察をしなかつたらあとで後悔しただろう

と感想をもらし、同九時四十分教授、学生の盛大な見送りを受けて自動車で名古屋に向つた。

注　豊橋新聞　昭和三十年十二月十日所載。

愛大華日辞典編纂処を訪れた馮乃超氏

教授と学生の團結を賞讃

中國学術視察団
副団長馮乃超氏　きのう愛大を視察

既報、八日来豊した中国学術視察団の副団長馮乃超氏（中山大学副校長）は昨九日午前九時蒲郡ホテルから自動車で愛知大学に招かれ学内の図書館、華日辞典編纂処などを視察ののち、八番教室に集った約八百名の学生に対し「愛大をみて印象深いことは学長をはじめ教授と学生とが非常に団結して活溌に学究を進めていることだ、これは大へんいい校風だと思う、帰国したら中国と関係の深い愛知大学のために出来るだけの協力と援助をしたい」とあいさつした。

馮氏は同大学を挙げての歓迎に終始笑顔をもって応え、大いに満足の態で約四十五分間の愛大訪問を終り名大さし廻しの自動車で名古屋へ向った。

注　不二タイムス　昭和三十年十二月十日所載。

華日辞典を視察

【豊橋発】八日愛知大学の招きで豊橋を訪れた中国学術視察団首席団員馮乃超氏は同夜蒲郡ホテルに一泊、九日朝九時から愛知大学を訪れた。

小岩井学長、松葉教授、山崎文学部長らの案内で学内の国際問題研究所、中国図書館、霞山文庫、愛大図書館、華日辞典編集所を次々に視察した。

特に華日辞典編集所では鈴木択郎教授、内山正夫専任講師らの編集記録の説明を熱心に聴き、郭沫若氏の好意で同学に贈られた単語カードを手にとって興味深く見学したが、内山講師からお土産にと編集記録アルバムを贈られた。次いで学生参加の講演会に臨み

「愛知大学が中国研究に熱心であることを見て非常にうれしい。国に帰って中国人民にこのことを伝えたい。また愛大との教授の交換を通じ学問文化の点から日中友好がますます盛んになるよう具体的に研究したい」

と語り、同九時四十分名古屋大学江上不二夫教授の出迎えを受け自動車で名古屋に向い、名大歓迎会に臨んだ。

郭沫若氏ら関西へ

中国科学院学術視察団の郭沫若氏らの一行は、ひとまず東京での日程を終え、九日朝九時東京発特急「つばめ」で関西に向った。一行は十日京都の立命館大学で、十二日大阪大学でそれぞれ講演する。

注　朝日新聞　昭和三十年十二月十日所載。

「四つの現代化」の中国を訪問して

図書館事務長　山下　輝夫

馮乃超先生に再会

日程も終りに近づいた六月一六日、我々は国立北京図書館を訪問した。高校生（高級中学）のための閲覧室に当られた交流会場で劉李平館長は顧問馮乃超先生と副館長丁志剛先生を紹介された。「顧問馮乃超先生は、大学卒業まで日本で過され、中山大学副学長を勤められました」。馮先生は、おだやかにかつ流暢な日本語で歓迎の挨拶をされた。中山大学副学長の職名は、愛知大の三名のメンバーにも記憶があった。「もしかして、国際問題研究所の壁に掛けてある色紙をお書きになった先生では」同行の中山君が言った。休息の時間、私はメインテーブルにおられる先生に近づき、名刺を出し愛知大学から来たことを告げご挨拶をした。すると先生は笑みを浮べ「私は一九五五年に愛知大学を訪問し、中日大辞典編纂室をたずねました。その時の先生方は・・・鈴木先生はお元気でいらっしゃいますか。」私は感動した。そして中日大辞典改編作業のこと、鈴木名誉教授がその中心となって業務に取り組んでいらっしゃること、又大学は中国政経用語辞典編纂にも取り組んでいることなど一気にお話した。先生は「それは、中日両国人民の友誼と学術文化の交流にとっても意義深いことです。成功を祈っています。お帰りになりましたら皆様によろしくお伝え下さい。」先生は求めに応じてノートに“北京図書館馮乃超”とサインをして下さった。その時私ははっきりと想い出した。私の学生時代、中国学術代表団副団長として本学に来校され、私も学生歓迎委員会の一員として豊橋駅に出迎えたことを。この二十三年ぶりの感動的な再会は私個人にとってだけでなく、我が愛知大学にとっても意義ある事柄に想われたし、この任を果せたことは、身に余る光栄と感じながら、先生に礼をしてメインテーブルを離れた。

この前日の六月十五日、人民日報は馮先生の親しい友人であり、馮先生が訪日された時の代表団長であり、愛知大学にとっても係わりの深い中国科学院長郭沫若先生の永眠を報じていた。その場で馮先生におくやみを申し上げられなかったことが、今悔やまれてならない。

中日大辞典のこと

南京図書館蔵書数四七〇万冊・上海図書館蔵書数六五〇万冊・そして北京図書館は九七〇万冊だから、いくら書庫、閲覧室を見学しても、その中から中日大辞典にお目にかかるとは予想もしてなかった。ところが、北京図書館の「工具書（参考図書）、閲覧室」「東編組（東方言語目録編纂）室」、北京大学「文系教員閲覧室」で活用されている中日大辞典にお目にかかった。しかもこれらの部屋で、河北大学日語科教授許淑英先生、東編室の王慶元さん、又後に述べる北京大学日語科教授崔栄林先生から中日大辞典改編について熱心に質問された（出発前に、大辞典の今泉教授、用語辞典の近田さんに取り組み状況をおききしておいたのが役立った）。中国政経用語辞典の編纂事情を含めての

報告に、先生がたから称賛の意が表され、固い握手を交わした。そばにいた中国国際旅行社の通訳さんからも「中日大辞典は、私達の分社にも三冊もあり、大変役立っています」と伝えられた。

〔注〕「愛知大学通信」第十六号（昭和五十三年七月二十日）所載。

中华人民共和国北京市 国立北京图书馆 顾问

冯乃超先生：

今年六月参加日本图书馆友好之翼访华团的我校图书馆职员山下辉夫，中川桂一和中山钦司访问贵图书馆时，幸得面晤先生并承多方指导。我们得知这件事觉得非常高兴。

1955 年您任中国学术视察团副团长来日时，蒙您特意访问我校，参观了我们辞典编纂处，这对。我们是难忘的感激。我们所编的中日大辞典观在进行修改工作。兹谨奉上一本，务祈赏收，并请批评指教。随函附上四张照片都是山下照的。请您收下做个纪念。现在缔结了日中和平友好条约之际，两国人民的友谊和交流要更加增进。我们愿意通过学术交流对于日中两国的友好有所贡献。我们甚愿以我校校长为团长的友好代表团明年夏季能访问贵国。我校已向中日友协会长廖承志先生提出这个愿望。如蒙您从旁帮忙能实现访华，我校感谢不尽。专此奉恳，即敬祝健康。

爱知大学中日大辞典编纂处

［注］山下図書館事務長から訪中報告を受けての挨拶。

「冯乃超年谱」

前略

一九五五年 五十五岁

十一月二十七日 应日本学术会议之邀，随以郭沫若为团长的中国访日科学代表团离京转道赴日。任秘书长。

十二月一日 从香港乘飞机抵达日本东京，受到热烈欢迎。次日访问日本学术会议。三日访问东京大学。四日在箱根举行记者招待会。

十二月五日 访问千叶县。

十二月六日 回东京访问日本国会。又应邀出席岩波书店出版的《世界》杂志创刊十周年纪念会。八日应邀访问早稻田大学。与日本老作家秋田雨雀互相题字留念。

十二月九日 往京都参观访问。次日出席在京都大学主办的欢迎宴会。

十二月十二日 到达大阪访问，出席欢迎茶会。次日访奈良东大寺。

十二月十四日 从大阪到冈山县访问。

十二月十五日 从冈山到达广岛访问。

十二月十七日 访问福冈九州大学。

十二月十八日 参观下关市和八幡市。次日由福冈回到东京。

十二月二十二日 出席日中友好协会等三个团体联合举行的欢迎酒会。晚离东京赴下关。又赴爱知县丰桥市爱知大学与教师们座谈，并作题词："为中日两国文化交流打好坚实的基础。"

十二月二十五日 中国访日科学代表团乘苏联轮船 "力牙兹斯克号"离开下关回国。二十八日返回上海，应召与郭沫若同赴杭州向毛泽东主席汇报。后作访问记《友谊的旅程》，载次年二月四日《中山大学周报》第一三七期。

後略

〔注〕「默默的播火者」 2001 年 9 月中山大学出版社「冯乃超诞辰百年纪念文集」中の年譜より抜粋。

讣　告

中国共产党优秀党员，无产阶级文化战士，教育家，革命活动家冯乃超同志，因长期患病不幸于一九八三年九月九日十一时十分在北京逝世，终年八十二岁。

冯乃超同志是广东省南海县人，出生于日本横滨，自幼在日本求学。早年在日本东京帝国大学读书时，加入日本共青团外围组织马列主义研究会，一九二七年回国参加革命工作，一九二八年加入中国共产党。

冯乃超同志长期从事党的统一战线工作，组织工作和文化教育工作。他是文艺界早期从事革命活动的共产党员，著名文学团体创造社后期的主要成员；后又与鲁迅等筹组中国左翼作家联盟，起草左联“理论纲领”。第二次国内革命战争期间，冯乃超同志历任创造社编辑，中国左翼作家联盟党员书记，中国左翼文化总同盟党员书记，中共中央机关刊物《红旗报》编辑。抗日战争和解放战争期间，冯乃超同志在周恩来同志和中共中央南方局的直接领导下，广泛团结知识界人士，为党的统一战线和文化宣传做了卓有成效的工作；历任国民政府军事委员会政治部第三厅中共特支书记，中共中央南方局文委委员，重庆国共谈判中共代表团顾问，中共华南分局文委书记。北平解放后，历任华北人民政府教育委员会委员，第一届全国政协代表，中华全国文学艺术工作者代表大会代表资格审查委员会副主任。中华人民共和国成立后，曾担任中央人民政府政务院文化教育委员会副秘书长，中直党委文教分党委书记，中央人事部副部长，中山大学党委第一书记，副校长，中共广东省委委员，中共广东省委高校党委第一书记，北京图书馆顾问。冯乃超同志曾当选为第一届全国人民代表大会代表，中共八大代表，广东省政协副主席，第四届，第五届全国政协委员，第一届，第四届中国文联全国委员会委员。

冯乃超同志是我党久经考验的共产主义老战士。大革命失败后，他放弃了在日本东京帝国大学的毕业考试，毅然回国参加革命工作，热诚投身于各个历史时期革命需要的工作。在十年动乱中，他备受迫害而坚强不屈，坚决抵制和反对“左”的错误路线。五十多年来，冯乃超同志始终以党的利益为重，忠贞不渝，立场坚定，正直无私，功成不居，埋头苦干，认真负责，表现了一个共产党员的优秀品格。他在长期的革命斗争中，认真贯彻党的方针政策，团结同志，兢兢业业，为中国革命事业，文化教育事业做出了重要贡献。

冯乃超同志虽多年患病，但革命意志坚强。他衷心拥护党的三中全会以来的路线，方针，政策，关心国家四化建设事业，直到生命的最后一息。他生前遗言:丧事从简，不开追悼会。

特此讣告。

冯乃超同志治丧委员会

一九八三年九月二十日

訃　告

中国共産党の優秀な党員、プロレタリア的文化兵士、教育者、革命活動家である馮乃超同志は長期の病気のため、不幸にして一九八三年九月九日十一時十分に北京で逝去された。享年八十二才である。

馮乃超同志は広東省南海県人で日本の横浜で生まれた。
幼時日本で勉強し若年のころ日本の東京帝国大学在学中に日本共産主義青年団の外郭団体であるマルクス・レーニン主義研究会に入会し、一九二七年に帰国して、革命の仕事に参加し、一九二七年に中国共産党に加入した。

馮乃超同志は長期にわたって、党の統一戦線工作、組織工作と文化教育工作に従事した。彼は文学芸術界で早期の革命活動に従事した共産党員であり、有名な文学団体“創造社”後期の主要のメンバーであった。後にまた魯迅らとともに中国左翼作家連盟の創設を計り、その「理論綱領」を起草した。第二次国内革命戦争の時期に馮乃超同志は創造社の編集者、中国左翼作家連盟の党員書記、中国左翼文化総同盟党員書記、中国共産党中央機関誌“紅旗報”の編集者を歴任した。抗日戦争と解放戦争の時期に馮乃超同志は周恩来同志と中国共産党南方局の直接の指導のもとで、広範に知識界の人を団結させ、党の統一戦線と文化宣伝のためにすぐれた仕事をした。国民政府軍事委員会政治部第三庁の中共特別支部書記、中共中央南方局文化工作委員会委員、重慶国共談判中共代表団顧問、中共華南分局文化工作委員会書記を歴任した。北平の解放後、華北人民政府教育委員会委員、第一期全国政治協商会議代表、中華全国芸術工作者代表大会代表資格審査委員会副主任を歴任した。中華人民共和国成立以降、中央人民政府政務院文化教育委員会副秘書長、中央直属党委員会文教分党委員会書記、中央人事部副部長、中山大学党委員会第一書記、副学長、中央広東省委員会委員、中央広東省高等学校党委員会第一書記、北京図書館顧問を担当した。馮乃超同志はかつて第一期全国人民代表大会代表、中国共産党第八回代表大会代表、広東省政治協商会議副主席、第四期・第五期全国政治協商会議委員、第一期・第四期中国文学芸術界連合会全国委員会委員に選ばれた。

馮乃超同志は我党の長年試練を経てきた共産主義の古参戦士であった。大革命が失敗した後、彼は日本における東京帝国大学の卒業試験を放棄し、敢然と帰国し、革命の仕事に参加し、熱心に各歴史時期の革命に必要な仕事に身を投じた。十年動乱の間、彼は迫害をうけたが断じて屈せず、“左”の誤った路線を断固排除し、これに抵抗し反対した。五十余年にわたり馮乃超同志は一貫して党の利益を重んじ、忠節を変えず、立場を確固とし、率直で私心がなく、功に甘んじることなく、仕事に没頭し、真面目で責任を持ち、共産党員の優秀な品質を表している。彼は長年の革命闘争のなかで真剣に党の方針と政策を貫徹し、同志と団結し、刻苦勉励し、中国革命事業や文化教育事業のために重大な貢献をなした。

馮乃超同志は長年病を患ったが、革命の意思は強固であった。彼は真心から党の第十一期中央委員会第三回全体会議以来の路線、方針、政策を支持し、国家の四つの現代化の建設事業に最後の息をひきとるまで関心を持ち続けた。彼は生前に葬儀は簡素に、追悼会を開かぬよう遺言した。

ここに訃告する。

馮乃超同志葬儀委員会　一九八三年九月二十日